

皆様、こんにちは。

久留米大学附設中学校第四四回・高等学校第六三回入学式を迎えました。新入生の皆さん、入学おめでとうございます。保護者の方々も大変お慶びと存じます。心よりお祝い申し上げます。

また、本日のために、多くのご来賓の方々にもご列席いただいております。その上、永田見生久留米大学学長、神代正道学校法人久留米大学理事長、長谷川房生久留米大学附設高等学校同窓会長、緒方徹志久留米大学附設高等学校・中学校後援会長からは、後ほど、皆さんのためにご祝辞をいただくことになっております。ご来賓の方々にはご列席まことにありがとうございます。

さて、本校の入学式の式辞は、わたくしにとつて五回目にあたります。いつも思うのですが、式辞の準備はなかなか大変なのです。まず、ここには小学校を卒えたばかりの新中学生がいます。それから、附設中学校からの内部進学の新高校生がいます。そして、新たに、附設高校に入ってくる諸君がいます。そして、それぞれの保護者の皆様がいらつしやいます。皆さん全体に共通の話題は何だろうか、新中学生と新高校生の双方に意味のある話はどう組み立てられるのか、なかなか難しいことだということとは、想像できると思います。ところで、皆さんは、中学、高校の違いはありますが、同じ理念のもとで運営されている学校で十代の大事な期間を過ごすことになるという点では共通しています。そういう意味で、この学校を成り立たせている理念を確認することは、こういう場では欠かせないことであるし、また、適切なことでもあります。しかし、それをどう皆さんにとつて印象に残るように行うか、それはまた大問題であります。

この学校の理念は、

「国家・社会に貢献しようとする、為他の気概をもった誠実・努力の人物を育成する」ことであると、さまざまな場で述べてきました。為他という耳慣れない言葉、読み下すと、他の為、ということになると思いますが、この言葉が鍵だと思えます。これは、創立後四半世紀経った頃に、禅に造詣の深かった当時の校長、原巳冬先生が、創立時の板垣政参生の言葉を言いなおす時に付け加えられたものです。

しかし、為他とは何だ、という大変むずかしい。道元禅師の「正法眼蔵」にあるのですが、禅問答の中に出て来るわけですから、簡単にはわかりません。簡単にはわからないからこそ、まさに、人生の基本を象徴しているのかも知れないと思うことにしましょう。なお、板垣先生は、熱心なクリスチャンであり、原先生も禅に辿りつく前にキリスト教と出会っておられます。「為他」という言葉には宗教的なものを感じるべきかどうかは別として、

人間が決して一人だけで生きているのではない、さればこそ、自らの生きることが、世の中が少しでもよくなることに結びつくように、誠実に努力を重ねて行こう、と、本校の理念は読めると思います。

さて、新高校生諸君の場合は、ある程度、今後の進路についての具体的に考えるようになっていくでしょう。しかし、新中学生の場合は将来の道について何らかの思いというようなものが本当の意味で、自分のうちからわき出て来るということは、まだ、ないのではないのでしょうか。新高校生諸君も中学に入りたての頃のことを思い出してみてください。多分、あれも面白そうだ、これは意味がありそうだ、こういう仕事をしてみたい、と、こんな風に、自分の世界が広がるにつれて、次々と興味深そうな分野や仕事が見えてきたのではないのでしょうか。

皆さんの人生は、しかし、これからです。この先、何が皆さんの課題として待ち受けているかはわかりません。半世紀余り昔、わたくし自身が中学生や高校生であった頃に漠然と期待し想像していたようには、実際の日本の社会は、これまで展開してきませんでした。皆さんの場合を考えると、言うまでもなく、先のことはわからないことだらけなので、今という時に即しすぎた判断で、将来を決めるような行動することは勧められません。心掛けとしては何が起きてても対応できるように、皆さん一人ひとりが自らの総合的な人間力というべきものをひたすら高めることが望まれます。それにはどうするか。絶対に忘れてはいけないことは、皆さんの人生は、皆さん自身、皆さん一人ひとりのものだということです。他の誰のものでもありません。皆さんのご両親のものとも違いますし、将来、お子さんができたとして、お子さんのものとも違います。しかし、全く違うというわけでもない。皆さんはご両親の生き方から受け継ぐものがありますし、お子さんに伝えていかなければならないものもできてくるはずですよ。そういう意味では、皆さんは、ご家族の歴史を生きていくことになりますし、また、育った社会や国の歴史を作っていくという役割も担っています。けれども、それは決まった形のものではなくて、結果としてそうなるというようなことなので、皆さんとしては、何よりも自分を信じることしかありません。

問題は、しかし、なかなか信ずるに値する自分というものを作り上げることができないということなのです。強い自分、意義ある存在としての自分、そういう自分というものは、どういうものなのか。人間であるということに根源的な価値があるわけではありませんが、一人ひとりの立場としては、その上に、人それぞれによる違い、各人に与えられている条件、つまり、素質を活かして、それらを全面的に伸ばしていくことが望まれているわけです。そうして、総合的な人間力を備えた、特別な自分というものに至ることになります。しかし、伸ばすと言っても、その方向性は何に基づくのでしょうか。

ここで、附設の理念の核を成す言葉「為他」を思い出してみましょう。そう、ここまで皆さんは、どちらかと言うと、受け身の、つまり、あてがわれたことだけをこなしてきました。しかし、皆さんが今まで出会ってきた大人の人たち、みなさんのご家族、先生、それ以外でも、街で働いている人たちも、どなたも、受け身だけで生きていくわけではありません。皆さんが世話になっているということは、皆さんの世話をする人たちがいるからですが、やがて、皆さんも世話をする方に回ります。しかし、それがどんな形であるかは、皆さん一人ひとりの志に拠ることになります。そして、その志とは、皆さんがこれからのいろと勉強して、それこそ自分だけのものとして、育てていくものです。

附設の建学理念の背景は、改めて振り返ってみると、皆さんは、この世に生まれた以上、価値ある自分の実現を目指し、そのために誠実な努力を怠ってはいけない、そして、実は、皆さんが生きていくことになる社会が、結果として、よりよいものになっていくということになるという信念でしょう。附設から皆さんへのメッセージは、この信念を自覚し、その確信のもとで振る舞う人物になってほしい、ということだと思えます。念のために申し上げます。しかし、今の皆さんには、こういうメッセージは、まだまだ、難しすぎます。しかし、もう少し時間が経てば、このメッセージが発信している元気の素が、必ず身に染みて来ると思えます。

新中学生の皆さんは、まだ、自分の世界を広げるための真剣な努力を続けなければなりません。つまり、しっかりと勉強しろ、ということに尽きるのですが、それは自分のため、自分自身の成長のためでなければなりません。もちろん、ステップとして、何がしかの点数を目指すのは悪いことではありませんが、どこでも、どんなときでも通用する自分というものは、点数で測れるような単純なものではありません。本質とか基本とかいう言葉を覚えて、その意味を反芻しましょう。新高校生の皆さんは、もう少し、具体的な目標があると思います。何とかいうブランド大学に入りたいとか、安定と尊敬の得られる職業に就きたい、というようなことはあると思います。そのためには、厳しい勉強も欠かせませんが、ここでも合格とか資格取得だけでなく、深く広く、ものを見ることができるように、自らを鍛えてほしい、そのための基礎を附設でしっかりと身につけてほしいと思います。

まだまだ抽象的ですが、皆さんの附設生活を通じて、徐々に具体的な中身が増えてくるはずです。皆さんの課題はわたくしたちの課題でもあります。新入生の皆さん、一緒に、すばらしい学校生活を実現しましょう。

平成二四年四月六日

久留米大学附設中学校・高等学校 校長

吉川 敦